

# 名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.159

2006年8月

第3回 AC21国際フォーラム2006を開催



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

## 目次

●ニュース	
第3回 AC21国際フォーラム2006を開催	2
インターナショナル・アドバイザーボード（国際諮問委員会）報告書を野依議長が提出	5
名古屋大学説明会を開催	6
国際業務トレーニングセミナーを実施	6
国立台湾大学調査団が法人化現状等調査のため来学	7
平野総長が鈴溪義塾について特別番組で語る	7
●知の先端	
科学の社会性と合理性 伊勢田 哲治（大学院情報科学研究科助教授）	8
途上国の開発における国家の役割を求めて	10
木村 宏恒（大学院国際開発研究科教授）	
●教育のデザインとプラクティス	
ICT (Information and Communication Technology) を活用した法科大学院教育	12
千葉 恵美子（大学院法学研究科教授）	
●キャンパスクローズアップ	
総合研究棟（工学部3号館）	14
●学生の元気	
第55回東海地区国立大学体育大会	16
第60回大阪大学・名古屋大学対抗競技大会	17
名古屋開府400年 どうぞい!! 名古屋城 RAVE 鈴木 麻莉（教育学部3年生）	18
●部局ニュース	
21世紀 COE プログラム「博士の生き方」セミナーを開催	19
「稲垣克彦基金」創設における感謝状贈呈式	19
学術講演会「医用画像 in 名古屋」を開催	20
平成18年度工学部懇話会を開催	20
地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」講演会を開催	21
元東京入国管理局長による講演会を開催	21
国際開発研究科がオープン・キャンパス2006を開催	22
環境学研究科が大学院説明会を開催	22
シンポジウム「電力貯蔵の最新動向と将来展望」を開催	23
ICCAE 2006年第4回オープンセミナーを開催	23
第20回、第21回防災アカデミーを開催	24
多文化交流「スモールワールド・コーヒーアワー」を開催	24
博物館がSSH 関連講座「生命科学探究講座」に協力	25
博物館が第53回特別講演会を開催	25
博物館が「第1回地球教室～二千万年前の環境を訪ねて」を開催	26
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成18年6月16日～7月15日	27
●INFORMATION	
名古屋大学ホームカミングデー	30
概要パンフレット「名古屋大学プロフィール2006」を刊行	30
●イベントカレンダー	31
●ちょっと名大史	
夏目漱石（金之助）「祝辞」横額 一五高創立10周年記念祝辞―	32

# 第3回 AC21国際フォーラム2006を開催





7月4日(火)から6日(木)の3日間、イギリス ウォリック大学において、第3回 AC21 (Academic Consortium 21; 国際学術コンソーシアム) 国際フォーラムが開催されました。本学からは、平野総長、山本理事、早川 AC21推進室長をはじめ15名が参加し、参加教員による口頭発表、パネル発表及び医学系研究科、生命農学研究科の大学院生による研究発表が行われました。

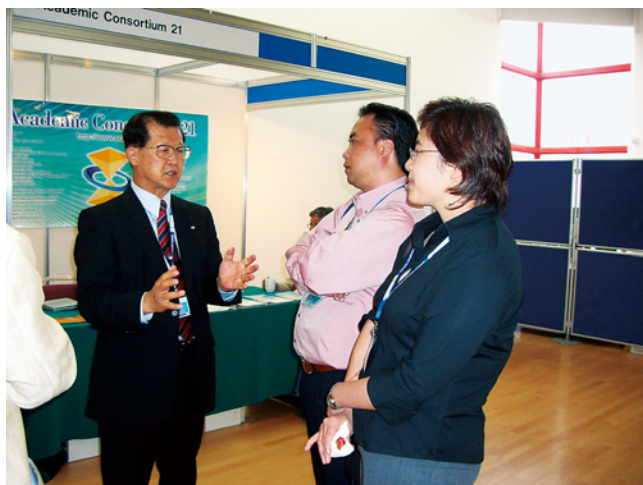
同時に開催された第4回 AC21運営委員会 (STC) 及び第2回 AC21総会 (GA) では、5年目を迎えたAC21の今後の役割と活動について討論が行われ、併せて新しく加入したメンバーの紹介がありました。STCとGAでは、今後のAC21の活動に関する有意義な提案が出され、AC21プレジデントの任期期間の修正など、いくつかの重要な決定がなされ、実り多いものとなりました。最終日の晩餐会、ガラ・ディナーでは、第3代 AC21プレジデントのシドニー大学ブラウン学長から、第4代 AC21プレジデントのウォリック大学ヴァンデルンデ学長への引継ぎが行われました。

第3回 AC21国際フォーラムは、「グローバル エデュケーション～21世紀における大学」を主なテーマとし、“Leadership and Management”、“Innovation and Enterprise”、“Global Student Imprints”の3つの小テーマから構成され、それぞれ同時進行で開催されました。これらのフォーラムでは、各分野の専門家が講演や発表を行い、参加者からの質疑応答も交え、大勢の参加者で賑わいました。また、リサーチ・フェスティバルも日替わりで開催され、7月3日(月)から7日(金)まで行われた10つのフェスティバルにおいて、60名を超す各国の研究者による発表が行われました。リサーチ・フェスティバル全体では、1,100名を超す参加者が集まり、大規模なサテライトフォーラムとなりました。



- 1 AC21プレジデント交代の様子  
左から、シドニー大学ブラウン学長、平野総長、ウォリック大学ヴァンデルンデ学長
- 2 開会講演をする平野総長
- 3 名古屋大学のブース

1 | 2  
| 3



- |   |   |                     |
|---|---|---------------------|
| 1 | 2 | ブースで説明する平野総長        |
|   |   | 各ブースの様子             |
| 3 | 4 | ゲストスピーカーとして発言する平野総長 |
|   |   | 開会講演をする平野総長         |

本学は、イギリス国内及び参加者が多かったヨーロッパ諸国に向けて、名古屋大学と AC21 についての認知度を高めるため、宣伝用ブースを設置しました。本学のブースでは、名古屋大学、21世紀 COE プログラム及び NUPACE の活動の宣伝を行いました。AC21 のブースでは、AC21 の PR 活動を中心に、各国の高等教育関係者が興味深く説明に聞き入っていました。

7月4日(火)に行われた開会講演では、平野総長が、ゲストスピーカーとして、ヴァンデルンデ学長、アダド UNESCO 高等教育ディレクターと共に発表を行いました。平野総長は、AC21 の“理念”、“活動”、“今後の展開”に焦点を当てたスピーチの中で、創設の経緯、高等教育発展のためのグローバルなレベルでの連携協力の推進、国際社会及び地域社会に貢献するための国際的な学術ネットワークの役割、AC21 メンバーの協力による教育・研究の促進、AC21 によって世界の異なる地域社会の架け橋を構築することなどについて説明しました。また、AC21 の具体的な

活動については、2年毎に開催される国際フォーラムや学生世界フォーラム、ベンチマーキング活動のこれまでの成果を中心に話しました。スピーチの最後では、人々が国や地域の境界を越えて共に暮らして豊かな生活をおくることができるよう、相互理解を促進し、固有の知識・文化・価値を共有する叡智を普及させる、という AC21 の理念をさらに追求していくことを今後の展望として強調しました。

最終日には、平野総長、ヴァンデルンデ学長、ブラウン学長及びイギリスとオーストラリアの学生ユニオンの代表が、学生と大学との関係、奨学金の意義、大学の抱える問題、留学生の受け入れや派遣などについて話し合いました。フロアからも様々な意見が飛び交うなど活発な意見交換が行われ、フォーラムはグローバル高等教育の発展へのさらなる期待とともに幕を閉じました。

詳しくは、ホームページ(第3回 AC21 国際フォーラムプログラム: <http://www2.warwick.ac.uk/newsandevents/events/ac21/globaled/> (英語のみ))をご覧ください。

# 国際ナショナル・アドバイザーボード（国際諮問委員会） 報告書を野依議長が提出



左から、平野総長、野依議長、北住高等研究院長

7月11日(火)、野依良治名古屋大学国際ナショナル・アドバイザーボード議長が、同委員会の報告書を平野総長に提出しました。

この報告書は、総長からの諮問に応じ、高等研究院の研究活動全般をテーマとして、本年2月に開催された第1回同委員会での議論を基に、提言としてまとめられたものです。

提出に当たり、野依議長から報告書取りまとめの経過等について説明があり、報告書を受領した平野総長からは、委員会からの提言を基に、高等研究院を更に発展させていきたいとの抱負が述べられました。その後、北住高等研究院長をまじえ、国内外の学術、高等教育・研究の動向などについて、意見交換が行われました。

なお、報告書では、高等研究院の使命に対して、下記のとおり様々な観点から提言がなされています。

1. 名古屋大学における特に優れた研究を認知すること。
2. 「最先端研究」及び「萌芽的研究」を支援すること。
3. 学際的交流及び国際的交流を触発、展開すること。
4. 人文、社会、自然科学並びにその工学的、医学的応用に関わる問題について独立の立場から権威ある助言を大学に行うこと。
5. 一般社会における科学の重要性の認知と理解を促進すること。

また、第2回国際ナショナル・アドバイザーボードは、「魅力ある大学院教育」イニシアティブを中心として助言をいただくよう、本年10月5日(木)～7日(土)に開催する予定です。



国際ナショナル・アドバイザーボード報告書

## 名古屋大学国際ナショナル・アドバイザーボード委員

(アルファベット順)

### ○委員

**イグナロルイス ジェイ 博士 (IGNARRO, Louis J.)**

UCLA 教授、名古屋大学名誉博士 専門：薬理学  
ノーベル医学・生理学賞受賞

**池端 雪浦 博士 (IKEHATA, Setsuho)**

東京外国語大学長 専門：歴史学  
アジア政経学会理事、Association for Asian Studies 会員

**李 遠哲 博士 (LEE, Yuan Tseh)**

台湾中央研究院院長、名古屋大学名誉博士 専門：化学  
ノーベル化学賞受賞

**野依 良治 博士 (NOYORI, Ryoji)**

理化学研究所理事長、名古屋大学特別教授 専門：化学  
ノーベル化学賞

**ロルフ シュトルナー 博士 (STÜRNER, Rolf)**

フライブルク大学教授 専門：民事訴訟法  
ハーバードロースクール客員教授  
前ドイツ民事訴訟法学会会長

**ミシェル ザンク 博士 (ZINK, Michel)**

コレージュ・ド・フランス副学長 専門：文学  
フランス学士院会員  
国際学士院連盟フランス代表

**赤崎 勇 博士 (AKASAKI, Isamu)** ※オブザーバー

名城大学教授、名古屋大学特別教授 専門：半導体工学・  
文化功労者 電子材料学

## 名古屋大学説明会を開催

7月11日（火）、東海・北陸地区国立大学法人等職員採用試験の第一次合格者を対象とした、名古屋大学説明会が開催されました。

同説明会は、午前10時30分から豊田講堂において行われ、平野総長のあいさつの後、佐分人事労務担当理事より本学職員の採用方法、身分、待遇面について説明があり、続いて昨年の採用試験に合格し、本年4月1日付けで採用された職員より体験談を交えた発表が行われました。



説明会（豊田講堂）の様子

その後、より詳しく本学の業務内容等を紹介するために、シンポジオンホールへ場所を移し、総務関係、財務関係、研究協力・国際関係、学務関係、附属病院等の職務内容ごとの説明コーナーや、労働条件、研修等に関する人事労務コーナー、また若手職員による相談コーナーを設け、参加者からのより具体的な質疑に対応しました。

当日は、約170名の参加があり、それぞれ真剣に説明を聞き、熱心にメモをとる姿が見受けられました。



説明コーナー（シンポジオンホール）の様子

## 国際業務トレーニングセミナーを実施

6月27日（火）、文系総合館7階カンファレンスホールにおいて、事務職員を対象とした「国際業務トレーニングセミナー」を開催しました。本セミナーは、文部科学省大学国際戦略本部強化事業の支援で企画されたもので、第1回目の今回は、「外国人研究者受入れ業務をまなぶー在留資格認定証明書申請手続きを中心にー」と題した講演が行われ、学内、近隣大学及び研究機関から、37名（学内）、



セミナーの様子

10名（学外）の計47名の参加がありました。

セミナーでは、まず、名古屋入国管理局就労審査部門の鈴木良智統括審査官から、「教授」、「研究」資格の在留資格認定証明書申請の概略を中心に説明があり、その後、参加者からの様々な質問に対して、詳細な回答がありました。

引き続き、外国人研究者の入国前、滞在中、帰国のプロセスに沿って事務手続きの方法を確認し、参加者がこれまでに経験した事例を挙げるなど、マニュアル通りではない活きた情報交換会となりました。

第3期科学技術基本計画において、大学や研究機関には優れた外国人研究者の招へい・登用の促進が求められており、その中では国際活動を担う事務体制の強化も謳われています。国際的視座に立ち業務を遂行できる大学事務職員の育成に期待が高まる中、このような機会に外国人研究者受入れに関する諸手続きを整理し、情報交換ができたことは有意義であった、との感想が参加者から多数寄せられました。

今回は今秋頃、異文化コミュニケーション場面において必要とされるカウンセリング・マインドを学ぶ研修を行う予定です。

なお、詳細は <http://www.iech.provost.nagoya-u.ac.jp/> をご覧ください。

## 国立台湾大学調査団が法人化現状等調査のため来学

国立台湾大学の副校長、政治学系教員及び法律学系教員が、6月29日（木）、国立大学法人の現状等を調査するため、本学を訪れました。

同大学は、台湾において政治学及び法学の分野で中心的な高等教育研究機関であり、本学法学研究科と学術交流協定を締結しています。今回の調査は、現在台湾においては、大学改革が進められていることから、本学及び他国立大学における法人化の現状等を把握し、今後の大学運営に資することを目的として実施されたものです。



質疑応答の様子

ヒアリング調査には、台湾側から、包国立台湾大学副校長、黄同大学政治学系教授、茂、宗の各法律学系教授、張法律学系助教授、本学側から、山本、佐分、豊田の各理事、市橋総長補佐、宇田川法政国際教育協力研究センター副センター長が出席しました。

最初に、出席者の紹介があり、続いて、市橋総長補佐から国立大学法人ができるまでの経緯、基本的な仕組み等について概要説明がありました。次に、予め先方から示されていた国立大学法人に関する質問事項に対し、本学側から個別に説明があり、最後にそれらに対する質疑が行われました。質疑の内容としては、国立大学法人における運営の仕組み、大学の予算収入等財政事項、とりわけ国立大学法人が学術研究の進展にどんな効果をもたらしたかなど、国立大学法人のメリットなどに質問が集中しました。同大学の出席者には、本学に留学経験のある方も含まれ、終始なごやかな雰囲気での質疑応答が進められました。

今回の調査では、先方に国立大学法人についての理解を深めていただくとともに、本学として、改めて国立大学法人及び本学の法人運営について再確認しました。また、現在同大学とは部局間協定により学術交流を行っていますが、今後は全学間での学術交流を進めることを課題とすることなどが確認され、非常に有意義な交流の機会となりました。

## 平野総長が鈴溪義塾について特別番組で語る

8月2日（水）、本部1号館総長応接室において、テレビ愛知による平野総長へのインタビューが行われました。今回のインタビューは、同局が、“鈴溪義塾”についての



インタビューの様子

特別番組を制作するにあたり、先に行われた中日新聞社主催の中日懇話会の席上で、総長が同塾に言及したことを受けて、依頼があったものです。

鈴溪義塾は、明治21年、盛田酒造11代目当主、盛田命祺により、知多半島小鈴谷（現在の常滑市）に創設された教育施設で、その教育水準の高さから、“知多の最高学府”と謳われた高等小学校です。現在のトヨタ自動車の基礎を作りあげたといわれる石田退三氏、敷島パン創業者の盛田善平氏等、多くの優秀な人材を輩出しています。

約1時間にわたる収録の中で、総長は、同塾の教育理念“志・学ぶ・情熱”にふれ、弱者の気持ちのわかるエリートの人材の輩出、次代のための学術研究を推進する必要性について語りました。

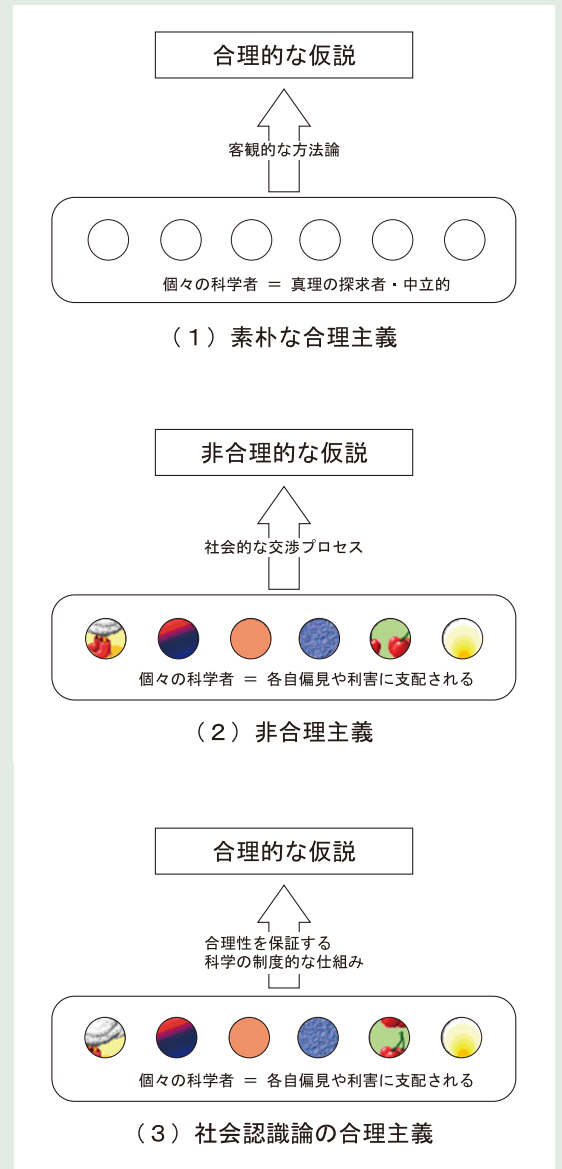
本インタビューの様子は、9月18日（月）、テレビ愛知開局記念特別番組「巨人たちの遺伝子（仮題）」の中で、紹介される予定です。（放映時間は未定）

# 科学の社会性と合理性

伊勢田哲治 大学院情報科学研究科助教授

科学哲学という分野について聞いたことがありますか？科学哲学は「科学とはなんだろうか」という問題を哲学の観点から考えて行く学問です。今回は科学哲学の最近の動向の中でも、社会認識論と呼ばれる分野の考え方と成果について話したいのですが、その前にその分野ができるに至る背景から説明したいと思います。

科学哲学や、その隣接領域である科学社会学で過去数十年にわたって問題になってきたのは科学は本質的に合理的な営みなのか、非合理的な営みなのか、ということです。（合理的とはどういう意味かというのもこれに関わる重要な問題ですが、今回の話では触れる余裕がありません。）常識的には、科学者は真理の探求者であり、科学の方法論は合理的に仮説を選ぶために最適な、合理性の権化のようなものと考えられます（図の（1））。しかし、他方、科学の歴史についての研究が進むにつれ、科学者というものが必ずしも中立的な立場から真理の探求だけを目指す存在ではないことははっきりしてきました。科学者の問題へのアプローチの仕方が、その科学者の育ち、時代背景、師弟関係、利害関係などさまざまな「社会的」な要因によって影響をうけることは、科学者たち自身の著述や発言から確かめることができます。たとえば量子力学の成立期に物理学者たちが第一次大戦後ドイツの反科学的な文化の影響を受けたことや、統計学の成立期にイギリスの統計学者たちが優生学（優良な子孫を残すことで人類を改善していこうという運動）を研究の動機としていたことなどが代表的な例です。科学者たちの意思決定にもお互いの力関係が強く働き、一種の交渉のプロセスだと見る見方もあります。こうし



科学の合理性についての三つの捉え方



た知見をベースに、科学は社会的要因に左右される非合理的な営みだという非合理主義の議論が登場し、特に1970年代以降の科学社会学はそうした考え方が支配してきました(図の(2))。しかし、科学哲学においては科学が基本的に合理的な営みだと考える合理主義が常に主流であり続けてきました。

社会認識論は、合理主義よりの立場から科学の社会性、特に制度的な仕組みを考えることで両者を融合させようとする分野で、1980年代の末から盛んになってきました。科学の制度的な仕組みといえ、査読のシステムといったフォーマルな仕組みもありますし、対立する仮説があるときに科学者の共同体がどちらを受け入れるか決めるときの手続きなどもインフォーマルな科学の制度的仕組みということになります。そうした仕組みそのものを明らかにするのは社会学の仕事ですが、そうした仕組みが科学の合理性とどうかかわっているのかを考えるのは哲学者の仕事になります。

社会認識論の成果として、たとえば、制度の作り方次第では、個々の科学者の非合理性がむしろ科学全体の合理性に積極的な役割を果たすこともあるのではないか、という可能性がいろいろな研究者によって分析されてきました(図の(3))。たとえば、哲学者のヘレン・ロンジーノは、人間が偏見や利害から自由であることがありえない以上、いろいろな偏見や利害を持った科学者が同じ領域においてお互いの学説をシビアに検討しあうのが客観性をもっともよく保証する方法だ、という分析を行っています。いろいろな偏見があるのはむしろ科学にとってよいことなのです。この観点からすれば、さきほど挙げた量子力学や統計学の

初期の事例についても、指摘されているような偏見だけでなく、それと対抗するような偏見や利害を持つ人が発言力を持つ限りは、むしろ科学の合理性や客観性にとってプラスであるということになります。

社会認識論はまだ若い分野であり、また、社会学、経済学、科学政策論などの領域と協力して行くことが今後の発展に不可欠です。私自身はこうした視点からの研究が科学の合理性についての理解を深めて行く重要な手がかりとなるのではないかと考えています。

1968年生まれ、1991年京都大学文学部卒業、1993年京都大学大学院文学研究科博士前期課程修了、1995年よりメリーランド大学(アメリカ)へ留学、2001年にPh.D.(Philosophy)取得。1999年に帰国して名古屋大学情報文化学部講師に就任、同助教授を経て2003年より名古屋大学大学院情報科学研究科助教授。主な著書は『疑似科学と科学の哲学』(2003年、名大出版会)、『認識論を社会化する』(2004年、名大出版会)、『哲学思考トレーニング』(2005年、ちくま新書)。  
モットーは「間違えたと思ったら恥ずかしながら直そう」。  
趣味は映画鑑賞。MGMのミュージカル映画に目がない。

いせだ てつじ



# 途上国の開発における国家の役割を求めて

木村 宏恒 大学院国際開発研究科教授

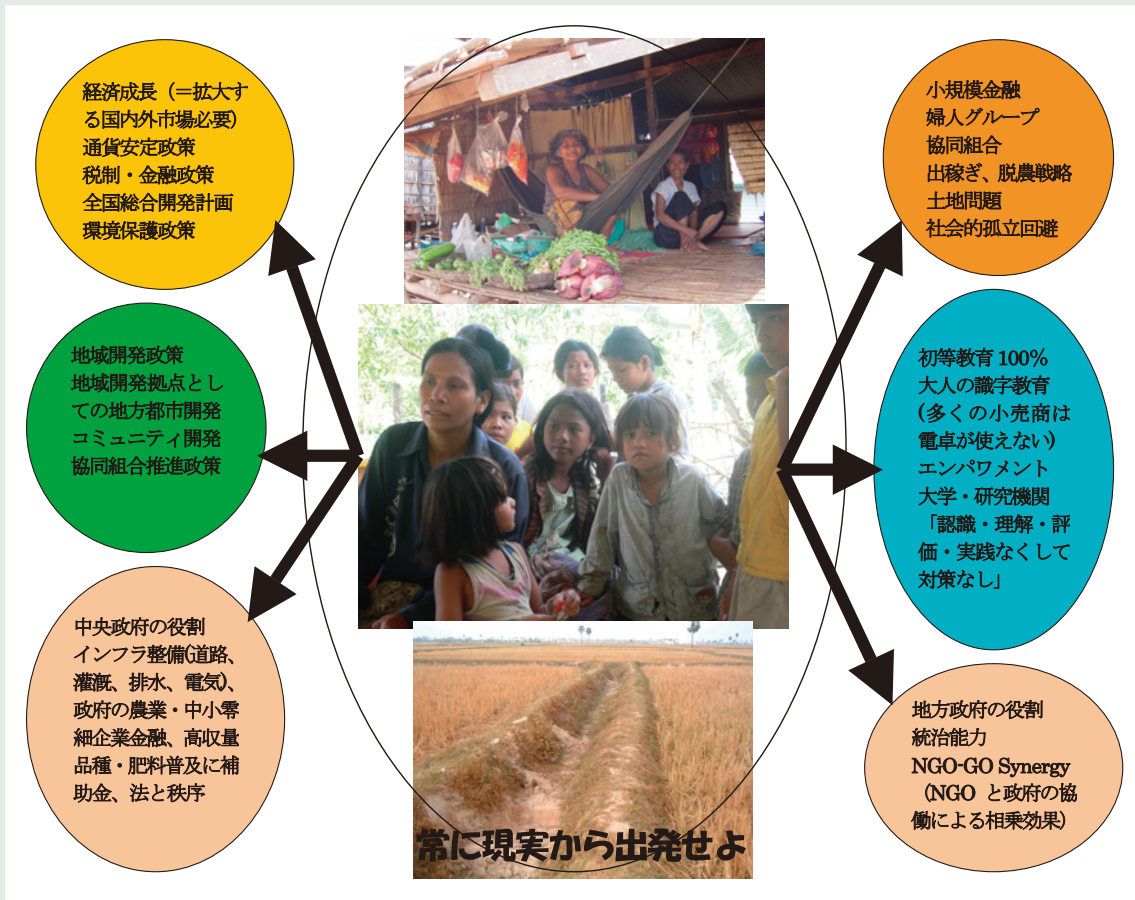
1989年に『インドネシア現代政治の構造』、93年に南北問題に大きな比重を置いた『現代世界の政治経済地図』、98年に『フィリピン 開発・国家・NGO』（ともに三一書房）を出した後、私が入り組んできたのは、途上国の開発（開発には経済開発、社会開発、法政開発の3本柱がある）における国家の役割の理論化です。この分野は、世界的に研究が遅れてきた分野です。その原因としては、第一に構造汚職や民主化の困難のなかで途上国政府が国家の分析を忌避してきた。第二に国際機関や援助国側が「内政不干渉の原則」から「開発の障害になっているのは途上国政府だ」と言えないし、言わない。その枠内で「包括的開発戦略」などが議論されてきた。第三に国家の役割イメージが違いすぎるものがあげられます。

第三の点に関して少し説明すると、開発途上国という日本では東・東南アジアがイメージされ、国家主導型の開発国家こそが成功の鍵であったという理解があるのですが、アメリカでは中南米が、ヨーロッパではアフリカがイメージされ、そこでは政治エリートによって政府が私的利益追求の道具とされ、「略奪国家」「政治的資本主義」が横行してきました。そこからは国家主導の開発などともないという認識になるのです。東アジアの国家主導型開発が権威主義体制の下で行われてきたため、90年代以降の世界的な民主化時代には普遍性を持ち得なかったこともあります。イギリス、サセックス大学の政治学グループは「民主的開発国家」の可能性の議論を展開しました。今後はこの枠組が重要と思います。

1990年代には「民主化、地方分権」が潮流となりました。しかしながら、宗教・民族・地域に分

裂し、かつメディアも普及していない社会で、政策による政党の選択＝選挙という民主的手段は機能するのか。民主主義は多数決＝数の暴力＝国民分裂のための制度ではないか。政党＝私利私欲の徒党集団、買収選挙の横行、地方ボスの強い影響力と私兵集団、数年に一度の選挙日だけ国民は主権者となる、といった民主政に対する疑念について、では先進国はどう対応し途上国ではどうなのか、途上国での政治文脈における説得力ある民主政擁護論が必要です。カンボジアのように、民主化＝まず選挙と対応した国では、政権を握った政党が官僚の政治任用を行い、その結果、有能な公務員を集めた安定した官僚制をつくり、一貫した政策を実施して開発を進める枠組みづくりに失敗しています。地方分権も教科書的に実施すると地方の王国ができ、中途半端な「中央集権下の地方分権」も生まれます。

政府とビジネスの癒着を防ぐためには、制度化された政府機構と制度化された民間経済部門と制度化された市民社会団体が形成され、その上で制度化された協議システムが構築され、政府サービスが実施される必要があります（ガバナメントからガバナンスへの議論）、その構築は前途多難です。先進国と途上国の最大の差は制度化レベルの差にあります。さらに大きな問題は、今のガバナンス議論では、中央政府は国民経済を成長させて、地方政府は地域経済を成長させて「なんぼ」の世界であるという合意は国際的にはまったく出来ていません。こうした錯綜した状況のなかで、民主化、開発国家建設、ローカル・ガバナンスの3本柱で、途上国の開発における国家の役割に筋道をつけることが今の課題です。



木村が主催する科研費研究。2005年ホームカミングデイのポスターから。

1970年大阪外大インドネシア語学科卒業、76年九州大学大学院法学研究科修了、日本学術振興会奨励研究員を経て、76年10月から熊本大学法学部講師—助教授—教授。92年から名古屋大学大学院国際開発研究科教授。94年フィリピン大学ロスバニョス校客員研究員。99年インドネシア、ガジャマダ大学大学院社会政治学研究科客員教授。

専門分野：開発政治学、国際政治学。

モットー：「自己を越えて進み、自己の否定を否定して無限なものとなることは、有限なもの自身の持つ本性である。」  
(ヘーゲル)

趣味：当然ながら趣味は仕事。プラス読書、写真。

きむら ひろつね



# ICT (Information and Communication Technology) を活用した 法科大学院教育

千葉恵美子 大学院法学研究科教授

## □ 法科大学院はどんなところか？

法科大学院は、司法制度改革の一環として、多様な専門性をもった質の高い実務法曹を育成することを目的として設置された専門職大学院です。法学教育を受けていない者であっても3年間で一通りの教育をして新司法試験に合格させることを目指しています。名大法科大学院にも、法学部や経済学部出身者だけでなく、人文系学部、医学部・理工学部など多様な学部から学生が集まっています。年齢も21歳から40歳代までおり、さまざまな経験と学歴をもつ者が、弁護士・裁判官・検事を目指して日夜勉学に励んでいます。

## □ 名大法科大学院教育の基本デザイン

名大法科大学院では、法曹としてのコミュニケーション能力を効果的に育成するために、ICT (Information and Communication Technology) の活用を教育モデルの中核に据え、NLS シラバスシステム (電子シラバス・システム) を基盤として、すべての教育活動と教育環境が整備されています。そこでは、①24時間体制で、②名大法科大学院の教育に関わるすべての学生・教職員・学外の教育支援者に、③平等に、④どこからでも、⑤法科大学院で開講されている全授業科目に関する全情報にアクセスすることが保障されています (情報の共有化・可視化・一元化・リアルタイム化)。NLS シラバスシステム上で、①名大法科大

学院で行われている全授業内容の一覧性が確保されているだけでなく、②授業のプラット・ホームとして、③予習・対面講義・復習を支援する各種のIT ツールの利用によって、法科大学院の教育にかかわるすべての人に、リアルタイムで、バーチャルな授業空間とコミュニケーション空間が提供されています (図1参照)。

## □ 協働教育体制と情報の透明性・客観性

私の担当科目である民法は、市民生活や企業取引に関するもっとも基本的な法律であり、多くの法科大学院で、複数の教員が多くの時間をかけて教育しています。名大法科大学院では、4名の教員が民法科目を担当していますが、相互に連携・協力して「学年進行に即して段階的に広く深く学ぶ」というカリキュラム設計がなされています。これまでの教育方法が、担当領域について縦割りに基礎的知識も応用力の育成も教育してきたことと比較すると、法科大学院教育では教員相互がリアルタイムで何をどのように教えているのか、どのような教材を利用しているのかを知っている必要があります。NLS シラバスシステムによって、いつでも、どこからでも他の教員の授業情報へ自由にアクセスすることができることは、教員間の協働教育体制を実現したばかりでなく、教育関連情報の透明性と客観性が保障されるようになりました。教員は全体としての教育目標を共有した上

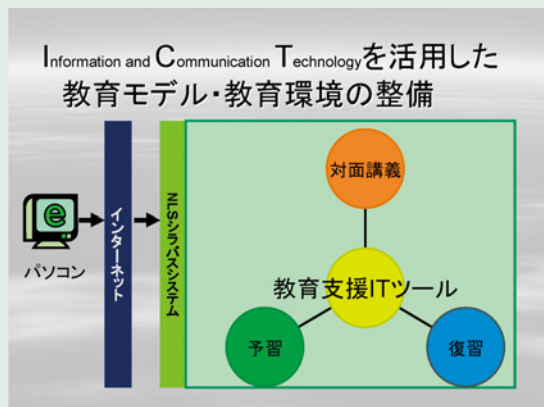


図1 名大法科大学院の教育モデルと教育環境

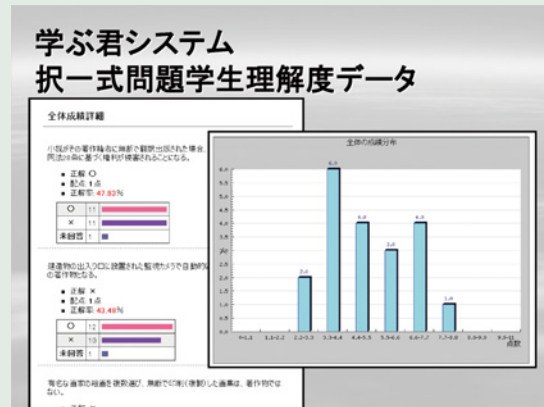


図2 学ぶ君システム

問題を解いたあと、正しい解答と解説が表示されるだけでなく、正解率や成績分布が自動的に集計され学生に提供される。

で、自由で創意工夫がなされた方法で教育することが相互に保障され、全体としてより高度の教育内容が実現できる仕組みになっています。

#### □ 対面講義だけが授業というわけではない

法科大学院では、教育の容量に対する時間の絶対的不足がしばしば指摘されていますが、名大法科大学院では、この点でも IT ツールが役立っています。NLS シラバスシステムを通じて、予習事項の提示・復習課題の設定・課題提出・授業内容に関する情報提供や質問への回答、個別指導なども、NLS シラバスシステム上で行うことができます。いわば、講義室で行われる対面講義以外の時間にも、バーチャルな授業空間とコミュニケーション空間があり、授業時間以外でも学生と教師が活発に活動をしています。このほか、択一問題形式で法的知識を確認することができる「学ぶ君システム」(図2参照)や講義をデジタルビデオ収録して、視聴したい部分のみを再生できる「お助け君ノート」など、教育活動全般で科目担当者の教育方法にあった IT ツールが自由に選択できるように工夫されています。

#### □ 新しい教育モデルと教育環境をめざして

IT リテラシーを感じさせない教育環境の整備、情報通信・コミュニケーション技術 (ICT) を活用した教育モデルの展開、そして、対面講義の時



法科大学院の模擬法廷

間での真剣な対話・暑い討論、このような試みを通じて、名大法科大学院は、コミュニケーション能力が十分に備わった質の高い法曹を育成しています。

専門職大学院の第1号として、名大法科大学院が開発する新しい教育モデルと教育環境に関する詳しい情報は、<http://nls.nomolog.nagoya-u.ac.jp/> において発信しています。また、法科大学院の教育環境を全学共通教育の基礎セミナーに応用した私の授業 (基礎セミナー・民法の世界で遊ぶ) が「OCW・名大の授業」の一つとして紹介されていますので、ご関心があればご覧ください。

1978年3月北海道大学大学院法学研究科修士課程修了。その後、北海道大学助手、札幌学院大学助教授、大阪大学法学部助教授を経て、1999年4月より名古屋大学勤務。  
モットー：よく食べ、よく眠り、とことん考えること。

ちば えみこ



## 13. 総合研究棟（工学部3号館）



工学部3号館（延べ面積13,104㎡）は、北棟・中棟・南棟で構成され、昭和37～45年にかけて建設された建物です。建設後42年の経年による老朽化は著しく、教育研究に支障をきたしていました。また、建物の構造耐震指標であるIs値も0.31と低く、耐震性能にも問題のある建物でした。

今回は、そのうちの北棟（昭和37～40年建 R4 5,402㎡）の耐震補強工事を含めた内外装の全面改修工事を実施しました。これは、国立学校施設緊急整備5か年計画の整備方針の一つである「老朽化した施設の改善整備」事業として位置付けられたものです。

改修にあたっては、大学の学術憲章（アカデミックプラン）に掲げる「研究と教育の基本目標」に従い、教育研究環境改善と耐震補強を実施し、

分散した実験研究室等を各専攻毎に移行・集約配置すると共に、弾力的・流動的に利用できる全学共同利用スペースを建物面積の20%確保しました。また、研究科や専攻の共用スペース、更には学生や研究者のリフレッシュスペースも併せて整備し、施設の効率的・流動的利用を促進できるような平面計画としました。

全学共同利用スペースは、学内公募により選定された既存の枠を超えた創造的な教育研究活動を行うことを目的とした研究チームに対し、利用規程に基づき一定期間有償により貸与することとなっています。

耐震補強方法は、強度補強形の外部架構の増設として、外付けフレームの補強方法を選択しています。これは隣接する工学部2号館（平成14年度



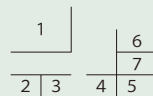
改修済み)と同様の補強形式であり、統一した外観ファサードとしています。桁行方向(建物の東西長辺方向)については、建物の両側に外付けフレームで補強すると共に、廊下に面する壁の小開口を閉塞して第2種構造要素の極脆性柱(地震時に上階の荷重を支えきれず、せん断破壊してしまう柱)を改善しました。梁間方向(建物の南北短辺方向)については、新設耐震コンクリート壁を増設すると共に既存壁に耐震スリットを設け、同じく第2種構造要素となる柱を改善しています。耐震外付けフレームは、1~2階をプレキャストコンクリート(工場生産)とし、3~4階を現場打ちのコンクリートとしています。これは、プレキャストコンクリートと現場打ちコンクリートのそれぞれの持つ特性を、コスト・構造・機能・工期の面から総合的に判断し最適な組み合わせとしたものです。

内部の諸室は、工学研究科の移行計画に基づき、Ⅵ系(社会基盤、マイクロナノシステム、計算理工学、量子工学)とⅡ系(応用物理学)を中心に、分散していた研究実験室などを集約配置しました。平面計画としては、基本的には教官室及び研究室等を南側に配置し、比較的大きな空間が必要な実験室等を北側に配置しています。全学共同利用スペースは細かい間仕切り等を設けない大部屋とし、後の設備配管接続が容易になるよう直天井にするなど、将来にわたってフレキシブルに対応できるようにしました。また、中央階段横には2~3階にラウンジを設け、学生や研究者のリフレッシュスペースとしています。

外観は周辺建物との調和を重視し、工学部2号館と同様に耐震外付けフレームにタイルを張った統一的な彫りの深いファサードデザインとしまし

た。タイルは雨水による洗浄効果を持った親水性のあるものを選定し、外壁の防汚を図っています。

玄関には自動扉及びスロープ、内部には多目的便所及びエレベータを設置し、バリアフリーに対応した建物としています。省エネ対策としては、複層ガラスの採用、居室の外壁内側への断熱材の吹付け、屋上緑化等を取り入れ、空調の熱付加を軽減しています。また、廊下や便所等は人感センサーを設置し、光熱費の軽減も図っています。今後、残る中棟・南棟についても順次整備を行っていく予定です。(施設管理部)



- 1 東北面外観
- 2 改修前の南東面
- 3 改修後の南東面
- 4 改修前の廊下
- 5 改修後の廊下
- 6 リフレッシュスペース
- 7 北側玄関

# 第55回東海地区国立大学体育大会

## 男子総合優勝、女子5位

平成18年度の東海地区国立大学体育大会（東国体大会）は、本学が当番校となり、本学体育施設及び市内などの公共体育施設を会場として、6月24日（土）・25日（日）、7月1日（土）・2日（日）・8日（土）・9日（日）の合計6日間にわたり、男子20種目・女子15種目について優勝を目指し熱戦が繰り広げられました。

6月25日（日）には、瑞穂公園陸上競技場において杉山副総長（東国体大会委員長）はじめ、各大学の関係者及び陸上部員出席のもと、本大会の総合開会式を執り行いました。梅雨時にもかかわらず、競技第二日目の途中降雨によりオープン競技となった女子ソフトテニス以外は、すべての競技種目を実施することができました。

大会結果は、男子は2年連続18回目の総合優勝を、女子は3位に僅か4点差の5位の成績でした。

なお、平成19年度の本大会は、岐阜大学が当番校となり7月上旬頃に開催される予定です。



開会式であいさつする杉山理事



男子総合優勝

### 第55回東海地区国立大学体育大会総合得点表

#### 男子

競技種目	大学名		岐阜大		名工大		豊技大		愛教大		浜医大		静岡大		三重大		名古屋大		備考
	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	
1 陸上競技	1	10	6	3	7	2	4	5	8	1	3	6	5	4	2	8			
2 水泳	3	6	6	3	8	1	5	4	7	2	2	8	4	5	1	10			
3 硬式野球	5	2	1	8	5	2	3	4.5		5	2	2	2	6	3	4.5			
4 準硬式野球	5	2.5	1	10	5	2.5	3	6	2	8	5	2.5	5	2.5	4	5			
5 硬式テニス	3	6	5	4	8	1	4	5	2	8	7	2	6	3	1	10			
6 ソフトテニス	5	2	6	1			1	6			3	4	4	3	2	5			
7 バスケットボール	1	10	6	3	8	1	4	5	7	2	3	6	5	4	2	8			
8 バレーボール	6	3	7	2	4	5	1	10	8	1	2	8	5	4	3	6			
9 卓球	1	8	4	4	6	2	7	1			2	6	3	5	5	3			
10 バドミントン	1	10	5	4	8	1	7	2	4	5	3	6	6	3	2	8			
11 サッカー	6	3	7	2	8	1	2	8	3	6	5	4	4	5	1	10			
12 ハンドボール	2	6	4	4			1	8	6	2	5	3	7	1	3	5			
13 柔道	1	8	5	2	5	2	4	4			2	6	5	2	3	5			
14 剣道	1	10	5	2.5	5	2.5	3	6	5	2.5	5	2.5	4	5	2	8			
15 空手道	5	4	4	5	7	2	8	1	1	10	3	6	6	3	2	8			
16 弓道	4	4	3	5			5	2	5	2	1	8	2	6	5	2			
17 体操	1	5					4	2			3	3	5	1	2	4			
18 馬術	2	5	3	4			1	6			4	2	4	2	4	2			
19 アーチェリー	4	2					5	1			1	5	3	3	2	4			
20 少林寺拳法	4	2			5	1	3	3					1	5	2	4			
合計得点		108.5		66.5		26		89.5		49.5		90		72.5		119.5			
男子順位		2		6		8		4		7		3		5		1			

#### 女子

競技種目	大学名		岐阜大		名工大		豊技大		愛教大		浜医大		静岡大		三重大		名古屋大		備考
	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	
1 陸上競技	3	5	5	3					1	8	7	1	2	6	6	2	4	4	
2 水泳	1	8	7	1					2	6	5	3	6	2	3	5	4	4	
3 硬式テニス	2	6	5	2					4	4	3	5	5	2	5	2	1	8	
4 ソフトテニス																			雨天オープン
5 バスケットボール	4	3							2	5	6	1	1	6	3	4	5	2	
6 バレーボール	4	4	6	2					1	8	7	1	3	5	2	6	5	3	
7 卓球	4	2							5	1			2	4	1	5	3	3	
8 バドミントン	6	2	7	1					1	8	5	3	2	6	4	4	3	5	
9 ハンドボール	1														2				オープン
10 柔道	1								2								3		オープン
11 剣道	3	3							4	2			2	4	5	1	1	5	
12 空手道	4	3	5	2					6	1	1	6	2	5	3	4			
13 弓道	4	4	6	1.5					2	6	6	1.5	3	5	1	8	5	3	
14 体操	1																2		オープン
15 アーチェリー	2														1		3		オープン
合計得点		40		12.5					49		21.5		45		41		37		
女子順位		4		7					1		6		2		3		5		



# 第60回大阪大学・名古屋大学対抗競技大会

第60回大阪大学・名古屋大学対抗競技大会（名阪戦）が、主に5、6月の土、日を中心として本学が当番校となり、開催されました。申し合わせ事項により、今年度は、ラクロス（男子）とアーチェリー（女子）が正式種目に昇格し、ラクロス（女子）が成績加算種目となりました。

今大会の結果は、男子は11勝16敗3分で負け、女子は9勝4敗で勝ち、総合成績は20勝20敗3分で引分けとなりました。

また、大会通算成績は男子が本学の19勝37敗4分け、女子が16勝33敗6分けとなりました。（総合優勝の制度が導入された第20回から今回までの総合優勝通算成績は、本学の16勝22敗3分けです。）

なお、平成19年度の名阪戦も、本学が当番校となり開催する予定です。

## 第60回大阪大学・名古屋大学対抗競技大会総合得点表

種目	戦績				
	対戦結果				阪大
	名大	スコア		阪大	
1 陸上競技	×	129	-	134	○
2 水泳	○	191	-	165	×
3 硬式野球	○	7	-	5	×
4 準硬式野球	×	3	-	4	○
5 硬式テニス	×	7	-	8	○
6 ソフトテニス	×	15	-	34	○
7 バスケットボール	○	87	-	62	×
8 バレーボール	○	3	-	2	×
9 ハンドボール	○	38	-	29	×
10 ラグビー	○	36	-	12	×
11 空手道	×	2	-	5	○
12 卓球	×	4	-	11	○
13 サッカー	△	1	-	1	△
14 バドミントン	○	7	-	2	×
15 柔道	△	4	-	4	△
16 剣道	○	4	-	3	×
17 ボート	×	-	-	-	○
18 ライフル射撃	×	1105	-	1112	○
19 弓道	○	93	-	80	×
20 自動車競技	×	-	-	-	○
21 少林寺拳法	×	1	-	8	○
22 アイスホッケー	×	0	-	1	○
23 体操	×	194.05	-	203.85	○
24 スキー	×	12	-	41	○
25 航空	×	500	-	573	○
26 アメリカンフットボール	○	31	-	20	×
27 ゴルフ	×	1	-	15	○
28 ソフトボール	-	雨天中止			-
29 フィギュアスケート	△	10.25	-	10.25	△
30 アーチェリー	×	3583	-	3717	○
31 ラクロス	○	11	-	8	×
男子優勝	×	11	3	16	○
1 硬式テニス	×	2	-	5	○
2 ソフトテニス	○	6	-	3	×
3 バレーボール	○	3	-	2	×
4 バドミントン	○	4	-	1	×
5 バスケットボール	×	58	-	68	○
6 卓球	○	3	-	1	×
7 剣道	○	4	-	0	×
8 弓道	○	39	-	34	×
9 フィギュアスケート	×	8.5	-	10.7	○
10 陸上競技	○	41	-	33	×
11 体操	×	73.1	-	84.85	○
12 ボート	○	-	-	-	×
13 アーチェリー	-	参加者少によりオープン			-
14 ラクロス	○	10	-	6	×
女子優勝	○	9	-	4	×
総合優勝	△	20	3	20	△



選手宣誓



陸上競技



少林寺拳法



準硬式野球



サッカー



卓球

鈴木 麻莉  
名古屋大学教育学部3年

名古屋開府400年  
どすこい!!名古屋城RAVE



相撲大会決勝トーナメントの様子  
日も暮れ、照明の効果によりいっそう緊張感のある取り組みになりました。

7月1日土曜日、日の暮れかかった名古屋城で前代未聞の学生イベントが開催されました。イベントのタイトルは「名古屋開府400年 どすこい!!名古屋城RAVE」。名古屋大学相撲部企画院 Born Japanese が実行委員会となって作り上げた、相撲とクラブという異色のコラボレーションイベントです。

名古屋城の二の丸広場を借り切り、屋台などを設置して夏祭りの雰囲気を作り上げ、さらにその会場内をクラブミュージックで包み込み、真ん中には土俵を用意。そこでアマチュア相撲大会を行うというものです。来場者数は約1800人。名古屋城がこういったイベントに、しかも学生団体に貸し出されるとするのは異例のことです。

日本の国技「相撲」の普及がまず一番のこのイベントのコンセプトでした。特に相撲にまったく

興味のない若者に対して、より親しみやすい形で相撲大会を楽しんでもらおうと考え、ただの相撲大会にならない、新しい形の相撲イベントを作り上げました。また、名古屋が2010年で「開府400年」を迎えるということもあり、「名古屋の学生が名古屋を盛り上げよう!」という想いがありました。こうして、「名古屋城で相撲とクラブのイベント」という大まかな形が出来上がったのです。

相撲大会は、本当に若者に受け入れられるのか、実行委員すら心配していました。しかし、実際イベントを行った後、インターネット上の掲示板では、「生で相撲を見るのは初めてだったが意外に面白くて吃驚した」「観戦中、血が騒いでいる自分がいてやはり日本人なのだと実感できた」などの意見が投稿されていました。そのような意見から、音楽や照明によって相撲大会にエンターテインメント性を加えることで、新しい形での相撲の魅せ方が出来たと考えています。これらの意見は、実行委員一同に大きな達成感を残し、学生でも、やろうと思えばなんでもできるのだという自信につながりました。

松原市長も相撲大会表彰式後の挨拶で、「私は学生の力をみくびっていた」「五年後にはより豪華な優勝賞品が出るようなイベントに育っていった欲しい」といった旨のお話をして下さいました。反省点は多々ありましたが、松原市長のおっしゃるとおり、毎年続く大きなお祭りにするのが今後の目標です。



相撲大会予選の様子  
多くの人が相撲大会に熱中していました。後ろに見える黒いイントレがDJブースです。

すずき まり  
1985年生まれ 愛知県出身

## 21世紀 COE プログラム 「博士の生き方」 セミナーを開催 —ターニングポイント あのとき私はこう考えた—

●大学院理学研究科

『博士の生き方』セミナー—ターニングポイント あのとき私はこう考えた—』が、6月24日（土）、野依記念物質科学研究館講演室において、21世紀 COE「物質科学の拠点形成：分子機能の解明と創造」の主催で開催されました。



講演の様子

セミナーでは、現在、企業や大学、ベンチャー等様々な分野で活躍している30歳代の博士学位取得者4名が、これまでの生き方や考え方について講演をしました。大学レベルで開催する博士課程の学生や進学希望者を対象としたセミナーは、いままでほとんど開催されなかったこともあり、筑波や東京、企業等から150名を超える参加がありました。実体験に基づいた講演内容は、どれも興味深いものであり、会場全体が迫力に満ちた講演に圧倒されていました。懇親会でも、講演者を囲んでの熱いディスカッションは続き、学生だけではなく、COEプログラムの若手スタッフにとっても、大変貴重な経験になりました。

## 「稲垣克彦基金」創設における感謝状贈呈式

●医学部附属病院

医学部附属病院は、6月27日（火）、同病院会議室において、稲垣克巳、道子様ご夫婦からの寄附金に対する感謝状贈呈式を執り行いました。

稲垣様ご夫婦のご子息は、昭和58年7月、同病院で頸部の手術を受けましたが、医療事故により、以後22年余り後遺障害と闘い、本年3月、病状悪化により他界しました。



寄附金目録を朗読する稲垣克巳、道子様ご夫婦

稲垣様は、ご子息の死を無駄にしないことを念願し、医療の安全と質の向上及び医学生への安全教育を充実させる活動を支援するため、このたび、同病院へ3,000万円の寄附を申し出ました。

この寄附金は、贈呈者稲垣様のご子息克彦様の名前を冠して「稲垣克彦基金」と称し、今後、同病院における職員、学生等に対する医療安全のための教育、研修などに活用します。

贈呈式には、稲垣様ご夫婦、井口病院長、上田医療安全管理部長及び相馬医療安全管理部副部長らが出席しました。まず、稲垣様から井口病院長に寄附金目録の贈呈があり、併せて、「医療の安全確保を一層発展させ、名大病院が、より信頼できる病院になって欲しい。」とのお話がありました。

続いて、井口病院長から稲垣様に、「本日のお申し出に対し、心から感謝申し上げます。これにより本院の医療の安全管理体制作りを一層推進いたします。」と謝辞を述べ、感謝状を謹呈しました。

## 学術講演会「医用画像 in 名古屋」を開催

●医学部保健学科

医学部保健学科放射線技術科学専攻は、7月8日（土）、今年4月に完成した同学部東館大講義室において、ペンシルベニア大学放射線学科助教授（放射線物理学主任）のメイドメント博士を招いて学術講演会「医用画像 in 名古屋」を開催しました。

メイドメント博士は、スロットスキャン方式デジタルマンモグラフィ（乳房撮影）の研究によりトロント大学から



講演会の様子

博士号（Ph.D）を授与され、トーマスジェファーソン大学を経て現職に至っており、専門は、デジタルマンモグラフィ、三次元乳房画像、平面検出器に関する物理学などです。

講演は、専門のデジタルマンモグラフィに関するもので、放射線技術科学専攻のスタッフ、学部学生、大学院生及び近隣の医療関係者を対象として行われました。前半は、米国とカナダで実施された、従来の増感紙フィルム系画像とデジタル画像を用いた場合の乳癌の検出率についての5万人を対象とした大規模な疫学的調査の結果について紹介があり、基本的には両者に差はないが、いくつかの附帯条件（年齢、組織等）ではデジタル画像が有為に高い検出率を示したというものでした。後半は、デジタルマンモグラフィに関する新しい撮影法の紹介で、マンモ専用CTと任意の断面を連続的に見ることのできるトモシンセシスについての話がありました。講演後の討論では、撮影法についての被曝に関する話題や日米の撮影法に対する考え方の違いなど多岐にわたる議論が行われ、実りの多い講演会でした。同専攻では、今後も機会があれば同様の講演会を開催していく予定です。

## 平成18年度工学部懇話会を開催

工学部は、7月5日（水）、同学部4号館4階大会議室において、名古屋大学工学部懇話会を開催しました。

本懇話会は、高等学校の進路指導担当教諭に同学部の教育内容を知ってもらうことを目的としており、毎年この時期に行っています。今年度は「工学教育の新しい試み－創成教育－」をテーマとし、愛知、岐阜、三重の東海3県下を中心とした60校から68名の高校教諭が参加しました。

まず、澤木工学研究科長から開会のあいさつ及び趣旨説明があり、井上教務委員会委員長から問題発掘、課題設定能力などの総合力を育成するために同学部が導入している

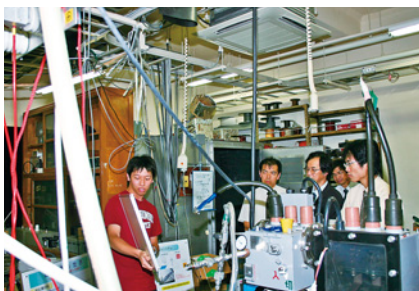
「創成教育」についての概要説明がありました。その後、同研究科社会基盤工学専攻博士課程前期課程2年島 知弘さんから、創成教育の一環として行われている「高度総合工学創造実験」についての受講報告が行われました。

引き続き、参加した高校教諭を13班に分け、研究室の見学が行われました。見学先の研究室では、大学院生が研究内容をわかりやすく紹介し、高校教諭と話をする機会が設けられました。その後、休憩を挟んで、質疑応答及び自由討論が行われ、高校教諭と同学部教員が忌憚のない意見交換をしました。

本懇話会は、高等学校教諭と大学教員との相互理解を深めるとともに、高校生が将来の方向性や大学、学部を選択する際に必要となる適切な情報を提供するよい機会になりました。



懇話会会場の様子



大学院生の研究発表を熱心に聞く高等学校教諭

## 地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」講演会を開催

●大学院生命農学研究科附属農場

大学院生命農学研究科附属農場は、地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」講演会の第1回を6月17日（土）に、第2回を7月8日（土）に、両日とも附属農場農業館において開催しました。今年度のテーマは、「地球のもう一つの成功者昆虫に学ぶ」です。

第1回は、梶村 恒同研究科助手が、「農業する昆虫」と題し、樹木に掘った巣孔を「農園」として扱い、そこで食料となるカビを育てる甲虫（キクイムシ）についての講演をしました。講演後、参加者は、キクイムシのついた枝を手に取り、「農業する昆虫」の巣穴を熱心に観察してい

ました。

第2回は、大場裕一同研究科助手が、「光る虫、光らない虫」と題し、ホタルなどの光る虫だけでなく、キノコ、プランクトンなどの中にも光る生き物がいることを紹介するとともに、ホタルが光る仕組みについて実験を交えながら説明しました。ホタルの発光を試験管の中で再現する実験は、参加者から大好評でした。

講演会にはそれぞれ30名を超える参加者があり、講演後には熱心な質疑応答が行われました。



キクイムシの巣穴を観察する参加者（第1回）



講演会の様子（第2回）

## 元東京入国管理局長による講演会を開催

●大学院国際開発研究科

大学院国際開発研究科は、6月22日（木）、元東京入国管理局長の坂中英徳外国人政策研究所長による留学生問題に関する講演会を開催しました。

この講演会は、同研究科の浅川晃広講師が担当する学部1年生を対象とする基礎セミナー「日本の外国人政策」の一環として行われたものであり、基礎セミナーでは、坂中

氏の30年以上にわたる入国管理局での経験をまとめた著書『入管戦記』（講談社 2005年）を教科書とし、留学生問題を含む、日本の外国人政策について様々な観点から活発な議論を行いました。今回の講演会は、『入管戦記』を読了した後、著者に直接触れ合う機会を持ち、理解を深めるために、教養教育院の支援を受けて行われたものです。

坂中氏は、留学生に関する諸問題の多くが、多額の借金を背負って日本に留学していることに起因すると指摘し、国費奨学金の拡充、留学生用住居の大幅な設置などによって、経済的負担を軽減することの重要性を訴えました。また、留学生の中には、卒業後日本社会で活躍する人も多数存在していることから、人口減少・少子化の中で、そうした優秀な留学生を企業が能力主義に基づいて採用し、積極的に活用していくことの重要性についても訴えました。

セミナーの受講生からは、「教科書の著者の話を直接聞く機会ができ、理解が深まった」などの感想があり、好評でした。受講生以外の参加者も、20名近くのにほり、留学生問題への関心の高さが伺われました。



坂中所長による講演の様子

## 国際開発研究科がオープン・キャンパス2006を開催

大学院国際開発研究科は、7月14日（金）、オープン・キャンパス2006を開催しました。

当日は炎天下にも関わらず、東海近県からだけでなく、沖縄など遠方から120名を超える（うち留学生約40名）参加がありました。

まず、施設見学及び留学生相談が行われ、その後の全体説明会では、「国際開発」、「国際協力」、「国際コミュニケーション」の各専攻の特徴や海外実地研修等特徴ある新教

育カリキュラムの紹介、入学者のバックグラウンドや修了生の就職先等についての説明がありました。また、大学院生による同研究科での学生生活や課外活動についての紹介が行われました。引き続き行われた専攻毎の説明会及び教員・大学院生との個別相談は、「近い距離で話ができ、研究科の雰囲気を感じ取ることができた」との感想が聞かれ、参加者の中には、遅くまで残って教員に熱心に質問する者もあり、大変好評を博しました。



説明会の様子



教員の質問に答える参加者

## 環境学研究科が大学院説明会を開催

大学院環境学研究科は、7月1日（土）、環境総合館レクチャーホールにおいて、大学院説明会2006を開催しました。

同研究科では初めての催しでしたが、厳しい暑さにも関わらず、学内外から120名近い参加がありました。

説明会は、林同研究科長のあいさつと同研究科の紹介に続き、教育研究や入試についての説明がありました。その他、研究のパネル展示、専攻別の説明会、研究室見学など、

バラエティに富んだ内容で、大多数の参加者は、3時間以上にわたるプログラムの最後まで熱心に耳を傾けていました。

同研究科は、社会の期待に応えるためにも、より内容を充実させながら、来年度以降もこうした説明会を開催していく予定です。



林研究科長による環境学研究科の概要説明



教育研究紹介パネルによる来場者への質疑応答の様子

## シンポジウム「電力貯蔵の最新動向と将来展望」を開催

●エコトピア科学研究所

エコトピア科学研究所エネルギーシステム（中部電力）寄附研究部門は、7月14日（金）、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて、エコトピア科学シンポジウム「電力貯蔵の最新動向と将来展望」を開催しました。

同研究部門では、将来の最適エネルギーシステムの構築を目指した研究開発の最新動向を、広く社会に知ってもら

うために、シンポジウムを毎年数回開催しており、今回は120名程度の参加がありました。

シンポジウムでは、松井同研究所長のあいさつ及び遠藤奎将同研究所客員教授の趣旨説明の後、中部電力（株）の長屋重夫氏、日本ガイシの中林 喬氏、明星大学の伊庭健二氏、（財）電力中央研究所の中川加明一郎氏及び（株）明電舎の奈良秀隆氏による講演が行われ、「電力エネルギー需要は、昼間と夜間で大幅に異なるため、エネルギー効率を下げる要因の一つになっており、電力貯蔵の重要性が高まってきている。また、社会の高度化に伴い先端産業への高品質な電力のニーズが高まり、それに向けた電力貯蔵の要求も強くなっている。電力貯蔵技術には、出力は小さいが応答特性の優れたものから、大容量で長時間動作の可能なものまで、さまざまな特性のものがあ、これらをよく理解した上で、巧く使いこなしていくことが重要。」といった、近年、発展が著しい電力貯蔵技術の将来に向けての課題について熱い議論が交わされました。



シンポジウムの様子

## ICCAE 2006年度第4回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、7月7日（金）、生命農学研究科A棟470室において、2006年度第4回オープンセミナーを開催しました。

竹谷同センター長により「農学国際協力における新段階：知のマーケットへの参加」と題して行われたセミナーでは、まず、文部科学省により1997年4月以来進められている、

拠点の機能を果たす国際協力センター及び大学、分野を横断するサポートセンターの設置と、これらの基盤整備上で大学の知のマーケットへの参画、また、JICAなどの国際援助機関による知恵のある援助などに見られる新たな動向を整理しながら、アメリカの大学などにおける国際協力の具体像を参考に、大学が「知のマーケット」に参画する方途を提示しました。その後、討議を行った結果、「プロジェクトよりもプログラムをどう構想し組み立てるかが知のマーケットに強く求められている」と結論づけられました。JICA 中部国際センター所長や岐阜大学教授等も参加し、熱のこもったセミナーとなりました。



第4回オープンセミナーの様子

## 第20回、第21回防災アカデミーを開催

●災害対策室

第20回防災アカデミーが、6月19日（月）、環境総合館レクチャーホールにおいて、開催されました。

今回は、産業技術総合研究所（旧通産省地質調査所）関西産学官連携センターの寒川 旭博士による「遺跡が語る地震の歴史～地震考古学への招待～」と題する講演が行われました。寒川博士は、遺跡に残る災害の痕跡を考古学的



オリジナルイラストを使った講演の様子（第20回防災アカデミー）

な発掘調査から見つける「地震考古学」の創始者であり、講演では、オリジナルのイラストなどを交え、歴史上の著名な人物と地震についての意外な関係など、これまでの調査からわかった幅広い知見が披露されました。参加者は、新しい学問を楽しく学ぶことができました。

7月4日（火）には、第21回防災アカデミーが開催され、坪木和久地球水循環研究センター助教授による「竜巻と台風の話～地上におけるもっとも激しい気象をいかにコンピューターで再現するか～」という講演が行われました。1999年に豊橋で発生した竜巻や2004年に全国的に大きな被害をもたらした台風23号といった顕著な気象災害をいかにしてスーパーコンピューターの中で再現するか、そしてその再現性はどれくらいのものであるかといった話題が取り上げられ、参加者は、最新の科学研究の魅力を垣間見ることができました。

防災アカデミーでは、火山、地震など様々な自然災害を幅広い視点から学ぶ企画を9月以降も準備しております。

詳しくは、災害対策室ホームページ（<http://anshin.seis.nagoya-u.ac.jp/taisaku/>）をご確認ください。

## 多文化交流「スモールワールド・コーヒーアワー」を開催

●留学生相談室

留学生相談室は、6月28日（水）、留学生センターと共催で、留学生センターラウンジにおいて、「世界の夏」をテーマにスモールワールド・コーヒーアワーを開催しました。

この催しは、留学生、日本人学生、教職員などが文化交流を体験し、互いに理解を深める場を提供することを目的に、同相談室が主体となって昨年の後期から行っている国際交流プログラムで、今回は、約45名の参加があり、学生スタッフが企画したジェスチャーゲームを通して、各国の夏について学びました。日本の夏のイメージとしてスイカ

割り、中国の夏として川遊びなどが紹介され、参加者は、大変盛り上がりました。参加したある学生スタッフは、「自分の国で経験したことのないこととことん味わえる。それに他の国の人と話して頭の中で世界旅行ができていような感じがする！」と感想を話していました。

今学期からは、留学生、日本人学生、外国人研究者などからなるコーヒーアワー・スタッフチームが結成され、今後も学生スタッフと留学生相談室が協力しながら、プログラムの企画を進めていく予定です。

詳しくは、留学生相談室ホームページ（<http://www.isa.provost.nagoya-u.ac.jp>）をご覧ください。



プログラムを支えているコーヒーアワー・スタッフチーム



ジェスチャーゲームの様子



## 博物館がSSH 関連講座「生命科学探究講座」に協力

博物館は、7月1日（土）、教育学部附属高等学校のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）関連講座「学びの杜・学術コース-生命科学探究講座-」の第1回講義を行いました。これは、今年から始まった同講座に博物館教員が協力し、計5回の講義を行うものです。

受講生は、まず、西川博物館長による「生物の多様性と



ニワトリの骨格標本で学ぶ受講生

進化-講義のはじめに-」と題する講義及び新美倫子同館助教授による「骨から学ぶ（1）出土骨からみえるもの」と題する講義を受講しました。

講義では、遺跡の解説を聞いた後、遺跡から出土した魚の骨の分類を体験しました。また、骨格標本を見ながら、ブタやウマの家畜化についての説明を受けました。午後から行われた蛭薙観順同館助教授の講義、「骨から学ぶ（2）トリの骨からみえるもの」では、博物館所蔵の骨格標本や顕微鏡標本を使い、「飛ぶ鳥」と「飛ばない鳥」の骨格の違いや「恐竜」と「トリ」の共通点等を学習しました。受講生は実物の標本や資料を手にする貴重な体験をし、実物標本への関心を深めた様子でした。

8月には西川館長による「無脊椎生物のいろいろ」、西田佐知子同館助手による「植物から学ぶ-生物の多様性-」、吉田英一同館助教授による「バイオミネラリーション-生命の驚異-」の講義が開講される予定です。

## 博物館が第53回特別講演会を開催

博物館は、6月9日（金）午後4時から、第53回特別講演会「名大東山キャンパスの周辺 東山丘陵地域の江戸時代から現代までの景観変遷～150年ほどのタイムトラベルへの招待」を開催しました。

松原輝男本学名誉教授と環境学研究科大学院生於保 俊氏の師弟コンビが、コンピュータグラフィックスを使い東



講演する松原名誉教授

山丘陵地域を復元し、その150年間の景観変遷を「絵」として示すことで移り変わりを比較しました。約60名の来聴者は熱心に見入っていました。

景観の復元には、『尾張名所図会』をはじめとする各種古文書や古地図、風景写真、地形図、航空写真が使われました。これは、膨大な情報を縦横に駆使する生物学者の松原名誉教授と、それを電子情報に変換して映像化する根気のいる作業に挑んだ環境学が専門の於保氏ならではの研究成果といえます。

博物館は、東山キャンパス全体を市民にも親しんでいただける魅力ある空間として整備する「キャンパスミュージアム」の構想をすすめています。今回の講演により、その構想は一層深みのあるものになりました。

# 博物館が「第1回地球教室～二千万年前の環境を訪ねて」を開催

博物館は、6月24日（土）、25日（日）の2日間、名古屋市科学館・発明発見創造クラブと共同で「第1回地球教室～二千万年前の環境を訪ねて」を開催しました。

「地球教室」は、小・中学生の親子を対象にした野外地質セミナーで、科学技術振興機構・研究者情報発信活動推進モデル事業「モデル開発」の一環として行われるものです。今年には岐阜県の地質を題材に、年9回、毎回テーマを変えて行う予定です。

第1回地球教室のテーマは、「二千万年前の環境を訪ねて」で、岐阜県瑞浪市の瑞浪層群（約2,000～1,500万年前の浅海で堆積した地層）から産出する化石の採集を通じて、太古の地球環境を考察しました。博物館と名古屋市科学館の職員及びアルバイト計7名で指導を行い、一般から募集し抽選で選ばれた33名（14家族）が参加しました。

初日は、天候に恵まれ絶好の野外活動日和となりました。参加者は、瑞浪市化石博物館を見学し地層や化石について学んだ後、約1,600万年前に堆積した地層があり、多くの貝化石を採取できる同市松ヶ瀬の土岐川河岸で化石採集を行いました。約2時間の採集でしたが、多くの化石を採取できました。



化石のクリーニング作業の様子



化石採集を行う参加者

2日目は、名古屋市科学館で化石のクリーニングを行いました。化石のクリーニングとは、岩石中に埋もれている化石をハンマーや小さいタガネ、ペーパーナイフなどを使ってきれいに削り出す作業をいいます。参加者は、化石を鑑定した上、ラベルを付け、標本箱に納めて持ち帰りました。

日程終了後に行ったアンケートの結果から、参加者の満足度は非常に高く、リピーター希望も強いことがわかり、第1回目は成功裏に終了しました。

「地球教室」は、今後も月1回のペースで開催します。興味のある方は博物館「地球教室」事務局までご連絡下さい。

（連絡先：earth@num.nagoya-u.ac.jp）

## ■今後の開催予定（日程等は変更になる場合があります）

回	場 所	日 程
第1回	瑞浪	6月24日（土）、25日（日）【終了】
第2回	中津川	7月16日（日）、17日（祝）【終了】
第3回	徳山ダム	8月19日（土）、20日（日）【募集終了】
第4回	飛騨	9月23日（土）、24日（日）
第5回	宮川	10月21日（土）、22日（日）
第6回	鶴沼	11月3日（祝）、4日（土）
第7回	根尾	11月23日（木）、25日（土）、26日（日）
第8回	名古屋	1月20日（土）、21日（日）
第9回	美濃赤坂	2月（調整中）

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年6月16日～7月15日]

記事	月日	新聞等名
1 台風に伴う豪雨と暴風の量的高精度予測を目指す観測プロジェクトが始まり、坪木和久・地球水循環研究センター助教授が代表を務める研究組織は、下地島・多良間島に降雨観測用ドップラーレーダーを設置	6.16 (金)	宮古毎日新聞
2 国内の大学が平成17年度に得た特許収入の総額は、国立大学が総額約4億5000万円、集計途中の公立、私立大学の分が約1億9000万円に達し、6億円を超え過去最高となる見込み 平成16年度も3億円以上の収入があった本学は一部の特許権が切れたが依然1億9900万円余りを確保	6.17 (土)	サンケイ
3 愛知県と愛知県医師会は16日、「医師確保支援委員会」を開催 会長の濱口道成・医学系研究科附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター教授ら委員9人が出席し、「ドクターバンク」への登録を促すなど、医師確保のためのさまざまな方法を協議した	6.17 (土)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
4 本学など9大学は今年度、一部に新しい昇進審査制度「テニユアトラック」を導入	6.18 (日)	朝日 (朝刊)
5 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 ホータンの昆盧舎那仏	6.18 (日)	中日 (朝刊)
6 古沢礼太さん・本学大学院生が代表を務めるNPO「愛・地球プラットフォーム」は、開催中のワールドカップに合わせ世界の子どもたちへサッカーボールを贈る「愛・地球ボール2006」を企画、賛同者を募っている	6.17 (土) 6.19 (月) 6.20 (火)	中日 (夕刊) 朝日 (夕刊) 日経 (夕刊)
7 特集ワールド 東京在住アフリカ人：在日アフリカ人の調査をしている和崎春日・文学研究科教授は、「20～40代の高学歴が多く、お金を稼ぐ目的で滞在している。日本人労働者にうっ憤をぶつけられたり、銭湯で好奇の目で見られるなど、慣れるまでかなり苦労をしているようだ」と話す	6.19 (月)	毎日 (夕刊)
8 本年度の三島海雲記念財団学術奨励賞に鳥橋茂子・医学部保健学科教授と福山泰子さん・本学文学研究科大学院生ら26人が選出され、博士課程の大学院生に対する奨学金は安藤房枝さん・同研究科大学院生に贈られた	6.20 (火)	中日 (朝刊)
9 公開実験講座2006「バイオサイエンス・バイオテクノロジーを体験する」受講者募集 生物機能開発利用研究センターの主催で8月5～6日、社会人及び高校生以上の学生を対象に開催	6.20 (火)	中日 (朝刊)
10 学生街ダンス：どすこい！名古屋城 RAVE 長野光太郎さん・本学学生	6.20 (火)	中日 (朝刊)
11 林良嗣・環境学研究科教授が、「まちづくり講演会」で「人口減少時代の街づくり」をテーマに講演し、「人口減少が進む社会では、財政負担を軽減させるためにも、人口を集約しなければならない」と訴えた	6.20 (火)	中日 (朝刊)
12 病を知る 労働とメンタルヘルス：尾崎紀夫・医学系研究科教授は、「何をストレスと感じるかは個人によって異なるが、周囲の人たちのサポートで心の病を防ぐことができる」と強調する	6.20 (火)	日経 (夕刊)
13 工作機械技術振興財団は、「第27次工作機械技術振興賞」の「論文賞」に本学と電源開発、神戸大学の「CNC装置の内部情報を利用した工作機械の熱変形推定」など2件を選定	6.21 (水)	日刊工業
14 第5回トランスレーショナルリサーチ懇話会が開催され、本学など全国5大学と1施設の研究者ら約150人が意見交換を行った 吉田純・医学部附属病院遺伝子・再生医療センター長らの講演の他、医学部附属病院の新中央診療棟に設置された「バイオマテリアル調剤部門」の施設見学も行われた	6.21 (水)	読売
15 どうなる どうする 桃花台線代替バス：加藤博和・環境学研究科助教授は、代替バス運行の採算面について、「朝の混雑時は、2時間で乗客約600人が小牧駅に向かい、8台をフル運行してもすし詰め状態だ。一方、昼間はバス3台が稼働すれば十分に輸送できるため、5台の車両と乗務員は不要になる。しかし、経費はその分かかることになる」と指摘する	6.21 (水)	読売
16 産業技術未来博物館構想について有識者の意見を聞く「モノづくり文化交流懇話会」の初会合が開催され、福田敏男・工学研究科教授は、「子どもから高齢者までワクワクする施設に。パーティーなど夜も使えるようにすれば面白い」と大胆な構想を述べた	6.21 (水)	中日 (朝刊)
17 日本上下水道の父 W.K.バルトンの功績 生誕150年記念に寄せて：加藤鉦治・教育発達科学研究科教授	6.21 (水)	中日 (夕刊)
18 高井治・エコトピア科学研究所教授らの研究グループは、超撥水性の培養テンプレートを開発、培養液の水滴中で立体培養を可能にした 従来の立体培養技術に比べ工程が大幅に簡素化され、医療分野への応用が期待される	6.22 (木)	日刊工業
19 上田実・医学系研究科教授は、患者の口の粘膜にある細胞を採取し培養したものを移植することで顔のシワをとる、再生医療を活用したアンチエイジング医療を全国の総合病院などの協力を得て5年間で30施設程度で実施する	6.23 (金)	日経 (朝刊)
20 22日、大学院国際開発研究科8階の多目的オーデトリウムで、元東京・名古屋入国管理局長の坂中英徳・外国人政策研究所長が「日本留学生受入政策の歴史・現状・課題」と題して講演した	6.23 (金)	毎日 (朝刊)
21 「不戦のつどい」7月8日開催 安川寿之輔・本学名誉教授が話す	6.23 (金)	中日 (朝刊)
22 本の現場：4ヶ月で27万部売れた「他人を見下す若者たち」 著者の速水敏彦・教育発達科学研究科教授は、「若者を中心に書いたけれど、こうした行動は年配の人にも見られる」と語る	6.23 (金)	毎日 (夕刊)
23 大学院医学系研究科の博士課程修了後、支援を受け、母国バングラデシュで無料診療のできる病院「アイチホスピタル」を設立したモアゼム・ホセイン院長が25日、「日本バングラデシュ友好協力会」の総会で活動報告を行った	6.24 (土) 6.26 (水)	朝日 (朝刊) 読売
24 若者 Eye：発展途上国の問題をテーマに劇を創作し、自ら演じる前田直人さん・本学大学院生	6.24 (土)	中日 (夕刊)
25 ひと：テトラヘドロン賞の受賞が決まった山本尚・本学名誉教授	6.25 (日)	毎日 (朝刊)
26 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 シルクロードの守護神たち	6.25 (日)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年6月16日～7月15日]

記事	月日	新聞等名
27 遠藤進平さん・教育学部附属高校2年生ら全国の高校生12人が、ジブラルタ生命奨学金の第一回米国留学生として選抜され、授与式が行われた	6.25 (日)	中日 (朝刊)
28 中部の医療：サプリメント 大澤俊彦・生命農学研究科教授は、1種類のサプリメントですべてをカバーしようとするのではなく、「本当に必要なサプリメントを適量取る。そうした習慣をつけてほしい」と話す	6.26 (月)	読売
29 訃報：平林康之・本学名誉教授	6.26 (月)	中日 (夕刊) 朝日 (夕刊)
	6.27 (火)	読売
30 26日、堀内守・本学名誉教授は、神田真秋知事の県政運営について民主党愛知県議団の知事選検討委員会の意見聴取を受け、万博と中部国際空港開港の2大事業については「成功」と評価した	6.27 (火)	中日 (朝刊) 読売
31 市民公開講座『『食べて出す』のは本能か?』7月15日開催 医学部附属病院排泄情報センターとNPO 愛知排泄ケア研究会の共催	6.27 (火)	中日 (朝刊)
32 医学部附属病院で起きた医療過誤のため、22年余りの療養生活の末に亡くなった稲垣克彦さんの遺族が、同病院に3000万円を寄付 これを受けて同病院は「稲垣克彦基金」を創設し、職員や学生らに対する医療安全教育の充実や医療事故の情報発信による再発防止などに活用する	6.27 (火) 6.28 (水)	朝日 (夕刊) 他4社
33 外国人が話す日本語サロン「アンコール遺跡：カンボジア」7月15日開催 リー・ソピアさん・法学研究科大学院生が話す	6.28 (水)	中日 (朝刊)
34 本学、東京大学などの研究チームは、ハワイにある「すばる望遠鏡」を用いてバナナ状の弧が向かい合った、奇妙な形の原始惑星系円盤を発見	6.29 (木)	中日 (朝刊) 日刊工業
35 28日、後房雄・法学研究科教授は民主党愛知県議団の知事選検討委員会の意見聴取を受け、「独自候補を確立することが望ましい」と述べた	6.29 (木)	読売
36 ロビー：平野眞一総長は、修士課程を終えると就職する学生が大半だという現状に危機感を抱き、「若手研究者の確保が課題」と話す	6.30 (金)	日経 (朝刊)
37 風向計：家森信善・経済学研究科教授 無借金経営そのものではなく、「攻めの無借金経営」という点こそが東海地域独自である	6.30 (金)	読売
38 第5回 Jr. サイエンス教室「遺伝子を見てみよう」遺伝子実験施設で7月22日開催	6.30 (金)	中日 (朝刊)
39 公開講演会「現代社会とライフサイクル—その光と影」7月15日開催 蔭山英順・教育発達科学研究科教授らが話す	6.30 (金)	中日 (朝刊)
40 大学院環境学研究科は、インドネシアのジャワ島で起きた地震の現地緊急調査団を7月4日から派遣する 6月上旬に続いて2度目の派遣で、田中重好・同研究科教授を団長に地域コミュニティーと非政府組織の協力関係などについて調べる	7. 1 (土)	中日 (朝刊)
41 かがく Cafe：安成哲三・地球水循環研究センター教授 生態系が気候に及ぼす影響に注目	7. 2 (月)	日経 (朝刊)
42 名古屋刑務所放水事件、13日に初公判：1審で弁護側に立って証言した二村雄次・医学系研究科教授は、「肛門括約筋が締まり、水は腸に入らない。腸が裂けるほど入れば、一目でわかるほど腹が膨れる」と話す	7. 2 (月)	朝日 (朝刊)
43 経済産業省が電子カルテを複数の病院間で共有するためのシステムづくりに着手 その第1弾として7月中に始める実証事業は、医学部附属病院を中核として、近隣の約30の医療機関の電子カルテシステムを相互接続する	7. 2 (月)	日経 (朝刊)
44 本学相撲部が中心となった学生団体が1日、相撲と音楽を融合させたイベント「どすこい!名古屋城 RAVE」を開催	7. 2 (月)	中日 (朝刊)
45 大学院生命農学研究科で木登りの癒やし効果や障害者へのリハビリ効果を研究する傍ら、森や自然との共生などをテーマにテレビ出演や講演を行っているジョン・ギャスライトさんが1日、「愛知万博の残したものと題して講演	7. 2 (月)	読売
46 東海地震に挑む：プレスリップを地震の前兆現象として最も合理的と考えられるモデルとする気象庁に対し、鷺谷威・環境学研究科附属地震火山・防災研究センターは、「プレスリップに過度に頼るのは危険」と警鐘を鳴らす	7. 3 (火)	日経 (朝刊)
47 本学相撲部に学生之新聞スタッフが“入門”	7. 4 (水)	中日 (朝刊)
48 「戦後期アイヌ民族—和人関係史序説」東村岳史・国際開発研究科助教授著	7. 5 (水)	中日 (朝刊)
49 福和伸夫・環境学研究科教授と埼玉県の地震計測会社は、地震の長周期地震動による超高層ビルの揺れの大きさが体験できる振動装置を開発 福和教授は、「建物の耐震や防災対策につなげてほしい」と話す	7. 6 (木)	中日 (朝刊) 他2社
50 北朝鮮ミサイル発射：「不戦兵士・市民の会」東海支部代表世話人の安川寿之輔・本学名誉教授は、「自分で自分の首を絞める行為だ」と残念がる一方、「これに乗じて、日本の防衛力を増強したり、アメリカとの軍事同盟を強化したり、自衛隊が侵略や武力行使できるようにするようなことがあってはならない」と懸念する	7. 6 (木)	朝日 (朝刊)
51 坪井秀人・文学研究科教授 重力失った声と言葉	7. 6 (木)	朝日 (夕刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年6月16日～7月15日]

記事	月日	新聞等名
52 2004年末のスマトラ島沖地震で被災したタイ人の歯科医ペジュ・メーティニーさんは、現在本学で医療の政策決定や公害対策などを学んでいる 被災時の教訓から、修士論文のテーマは「遺体の身元確認時の歯科記録の重要性」で、「歯科記録をきちんと残すようなシステムをつくりたい」と話す	7. 6 (木)	朝日 (夕刊)
53 「網膜色素変性症に関する医療講演会」23日開催 加地秀・医学部附属病院助手らが話す	7. 7 (金)	中日 (朝刊)
54 中部経済連合会と中日新聞社による「第4回 中央日本交流・連携サミット」8月2日開催 講演や科学技術交流財団理事長・松尾稔・本学名誉教授の司会によるパネルディスカッションなど	7. 7 (金)	中日 (朝刊)
55 ラボ列島：本学大学院環境学研究所 大平秀樹・同研究科助教授は、「感情も環境に適応するのに有利だから生じたはず」だとして、動物、個人、集団、社会、経済における「感情」を、進化の視点から総合的にとらえようとしている	7. 7 (金)	朝日 (夕刊)
56 医学部附属病院で今年3月に起きた医療事故で、同病院は、術後の管理体制に問題があったとする外部調査委員会の報告を発表	7. 7 (金) 7. 8 (土)	朝日 (夕刊) 他4社
57 「大学入試に関する高校・大学の交流会」が開催され、本学など12大学が参加 大学、高校の教員ら約50人が今秋の大学入試や最近の受験生の傾向などについて話し合った	7. 8 (土)	中日 (朝刊)
58 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 神仙としての仏像	7. 9 (日)	中日 (朝刊)
59 大学相撲の普及に貢献したとして、愛知医科大学理事長・加藤延夫・本学名誉教授に日本相撲連盟6段が授与された 加藤名誉教授は、「相撲や体育会のスポーツは人間形成に役に立つ。これからも名大相撲部だけでなく、大学相撲の発展に力になっていきたい」と話した	7. 9 (日)	中日 (朝刊)
60 スポーツと名古屋大学：東田和弘・博物館助手 硬式野球部と陸上競技	7.11 (火)	中日 (朝刊)
61 日本応用地質学会中部支部主催「夏休み親子体験ツアー」29日開催 足立守・博物館教授が講師 化石採取や降雨、土石流体験などにより、子どもたちに科学のおもしろさや防災について興味をもってもらう	7.11 (火)	中日 (朝刊)
62 大学院国際言語文化研究科メディアプロフェッショナルコースの授業「民間放送事業論」で10日、石黒大山・東海テレビ社長が特別講義を行い、「放送と通信の連携は今後ますます進む。お互いの長所を生かし、新しいビジネスを作らないといけない」と話した	7.11 (火)	中日 (朝刊)
63 「テクノフロンティアセミナー TEF52006」参加者募集 8月8～10日、工学部で東海地区の高校生を対象に最先端の工学技術の面白さと不思議を体験してもらう	7.12 (水)	中日 (朝刊)
64 東海ラジオ主催「地震防災シンポジウム～東海・東南海・南海大地震 あなたは大丈夫？～」8月19日開催 福和伸夫・環境学研究科教授らが、地震に対して「すべきこと、しなければならないこと」を解説する	7.12 (水)	中日 (夕刊)
65 「名古屋大学英文学会2006年度公開サマーセミナー」28日開催	7.12 (水)	朝日 (夕刊)
66 太平洋戦争で従軍看護師としてフィリピンに赴いた日本赤十字社第302救護班大阪班の活動をまとめた記録誌「遥かなりプログ山」の朗読会16日開催 班員の生存者、福井孝子さんが編集し1981年に関係者らに配布したものを、1999年、孝子さんの次男・福井康雄・理学研究科教授らが復刻、福和教授が「若い人に戦争の実像を伝えたい」と、昨年から東海ラジオアナウンサーの谷川明美さんの協力で朗読会を始めた	7.13 (木)	中日 (朝刊)
67 人事院の国家公務員倫理審査会が、名古屋市内で有識者から意見を聞く地方懇談会を開催 市橋克哉・法学研究科教授ら5人が意見を述べた	7.13 (木)	中日 (朝刊)
68 東海地方6月の地震：林能成・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助手	7.14 (金)	読売
69 図解 診る・治す：18日に開院する名古屋セントラル病院の「ブレインスイート」は、本学医学部脳神経外科と光ファイバーでネットワークを形成 吉田純・医学系研究科教授は、「手術室内で刻々と変化する脳画像情報は、名大の脳神経科学教室、保健学科、放射線部を結んだネットワークのもとで共有化される。安全で正確な手術を行うだけでなく、経験が少ない医師はサポートして、外科手術のレベルアップと標準化に役立てたい」と話す	7.14 (金)	中日 (朝刊)
70 西村建二・名古屋市議が法廷の場で名古屋市議会の政務調査費の運用の実態を克明に証言：小野耕二・法学研究科教授は、「市議会には、判決を待たず、早急に領収書の公開などで使途を明確化するよう改め、自浄作用を発揮してほしい」と話す	7.14 (金)	読売
71 家森信善・経済学研究科教授 緩和政策を継続するべき	7.15 (土)	中日 (朝刊)
72 小中学生「論理的・数理的思考」弱い：浪川幸彦・多元数理科学研究科教授コメント「コミュニケーション能力の向上を意識した学習をすることが大切」	7.15 (土)	中日 (朝刊)

## 名古屋大学ホームカミングデイ

本学では、9月30日（土）に、全学同窓会の共催を得て、「第2回名古屋大学ホームカミングデイ」を東山キャンパスで開催します。

この行事は、卒業生・修了生、学生、現旧教職員等の本学関係者や学生の家族、地域の方々等に、本学の種々の活動に関する情報を発信するとともに、交流の場を提供し、大学の活動を理解してもらうことを目的とするもので、今年は、昨年に引き続き2回目の開催となります。

楽しい一日をお過ごしいただけるよう、準備を進めておりますので、ご家族、ご友人とお気軽にお越しください。

なお、詳細は、次号の名大トピックス160号（9月発行）でご紹介します。

また、ホームページ（<http://www.nagoya-u.ac.jp/home-coming-day/>）でもご確認ください。

日 時：9月30日（土）※雨天決行

場 所：名古屋大学東山キャンパス

時 間：午前10時～

テーマ：「宇宙から地球へ」

お問い合わせ：

名古屋大学ホームカミングデイ実行委員会（総務部総務課内）

電話：052-789-2012 FAX：052-789-2019



## 概要パンフレット「名古屋大学プロフィール2006」を刊行

本学では、このたび概要紹介パンフレット「名古屋大学プロフィール2006」（年1回発行）を刊行しました。

本誌は、本体編と資料編の2冊で構成されています。本体編は、研究、教育など本学の取り組みを8つに分け、それぞれに携わる人及びグループを通して本学の「未来」を視覚的に紹介するイメージ冊子であり、資料編は、数字によるデータで本学の「今」を理論的に伝えるデータ情報誌です。ご希望の方は、広報プラザ2階で入手できます。

なお、今年度は、本学から発行する広報誌として統一感を持たせる試みとして、高校生向けパンフレット「GUIDE TO NAGOYA UNIVERSITY 2006」（年1回発行）の表紙を、本誌と同じデザイントーンにしました。ご希望の方は、本部2号館1階入試課で入手できます。



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**3月22日(水)～9月30日(土)**

場 所：博物館展示室  
時 間：10時～16時  
休 館 日：日・月曜日  
入 場 料：無料

**第9回名古屋大学博物館特別展**

テ ー マ：スポーツと名古屋大学ーする・みる・つくるー



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

**8月23日(水)**

場 所：博物館講義室  
時 間：15時～16時30分  
入 場 料：無料

**第60回特別講演会**

演 題：スポーツと体力  
講 師：蛭田 秀一総合保健体育科学センター教授

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

**9月13日(水)**

場 所：博物館講義室  
時 間：15時～16時30分  
入 場 料：無料

**第61回特別講演会**

演 題：スポーツとファッション  
講 師：高橋 義雄総合保健体育科学センター講師

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

**9月22日(金)**

場 所：文系総合館 7階  
カンファレンスホール  
時 間：16時30分～18時

**国際言語文化研究科講演会**

演 題：島村抱月の文学理論について  
講 師：マッシミリアーノ・トマシ ウェスタン・ワシントン大学東洋語学部教授

[問い合わせ先]

国際言語文化研究科 福田 真人教授  
052-789-4792

**9月30日(土)**

場 所：博物館講義室  
時 間：午前  
入 場 料：無料

**第62回特別講演会**

演 題：健康運動の科学  
講 師：島岡 清総合保健体育科学センター教授

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

**9月29日(金)～10月20日(金)**

場 所：中央図書館 4階 展示室  
時 間：10時～17時 (土・日とも)

**附属図書館2006年秋季特別展**

テ ー マ：江戸時代の村と地域

[問い合わせ先]

附属図書館庶務掛 052-789-3667

名大トピックス No.159 平成18年 8月18日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

マリーゴールドが咲き誇る鶴舞公園から医学部附属病院病棟を臨む  
(平成18年7月26日)



## 52 夏目漱石（金之助）「祝辞」横額 一五高創立10周年記念祝辞一

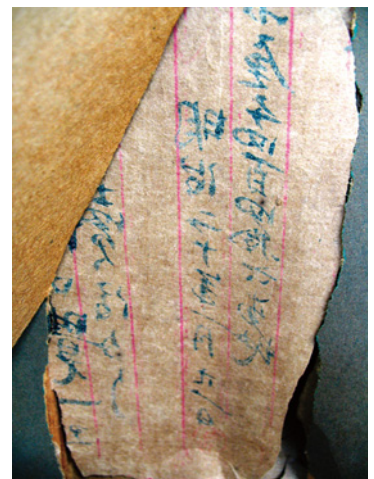
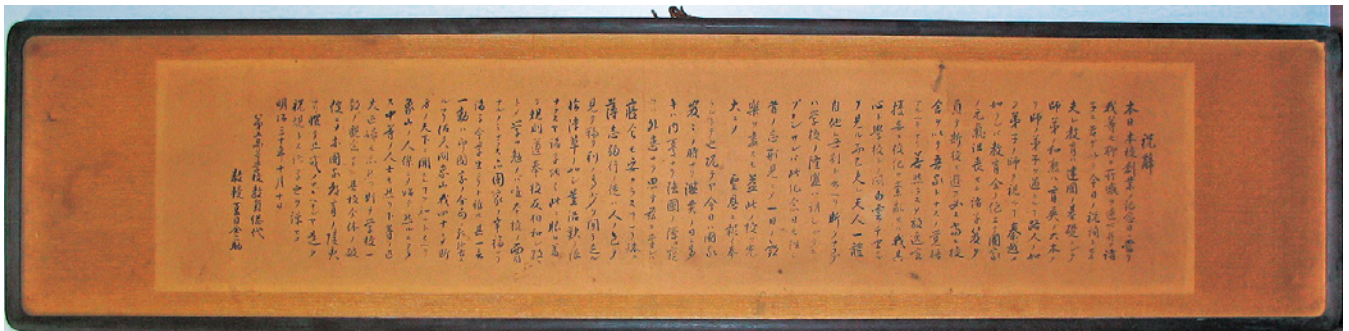
2006（平成18）年6月、大学文書資料室あてに一通の電子メールが届きました。差出人は本学名誉教授で、約20年前に本学職員クラブ内の一室にあった横額についての照会でした。その横額には旧制第五高等学校（五高）教員時代の夏目漱石（金之助）が述べた訓辞らしいものが書かれていたが、それは当時のままに現存するのかというものです。今回は、この情報をもとに行った調査で明らかになったことを紹介します。

現場確認の結果、職員クラブ内に漱石の横額はありませんでした。当時の様子を知っている職員から、かつて確かに横額はあったが、約10年前に職員クラブで小火があった際に焼失したようだとの推測情報を得ただけでした。そこで、職員クラブ建物を管理する部署にも尋ねましたが、その場では具体的な情報は得られませんでした。しかしその後、同部署から、キャンパス内の別の場所に保管されていた横額を発見したとの連絡がありました。縦36cm×横158cmの横額（写真1）には、1897（明治30）年10月10日に五高（熊本大学前身校）の創立10周年記念式で、漱石

が教員総代として述べた祝辞が書かれていました。一見して、文字は肉筆ではなく印刷のようで、残念なことに横額裏面に数個の破損箇所がありました。

熊本大学の五高記念館に尋ねたところ、この漱石の「祝辞」原本（漱石の直筆ではなく代筆と思われる。写真2）は同館に保存されていること、約20年前に開催された五高100周年記念式典の際には同祝辞の複製品が作成・頒布されたことなどが判明しました。これによって、本学内にある漱石の横額は複製品であることが明らかになりました。

一方、横額裏面の破損部分から、額装部材に「明治二十年一月廿一日」と筆書きされた野紙が利用されていることが判明しました（写真3、4）。これによって、約20年前に作成・頒布された複製品の横額部材に上述のような野紙が利用されることは通常考えられないこともあって、その作成時期は不明のままです。また、何よりもこの横額がどのような経緯で本学に存在するのかについても明らかではありません。



1 本学シンポジオン内の倉庫に保管されていた横額  
 2 五高記念館に保存されている「祝辞」原本（熊本大学五高記念館ウェブページより）  
 3、4 横額裏面の破損部分からみえる野紙